

心療内科医の桑山紀彦さんが展開する「地球のステージ」が今年で21年になった。旅や医療活動を通して訪れたアジアや中東など世界の現状や子どもたちの姿を、語りと映像、音楽で伝えるプロジェクトだ。披露する歌は自身が感じたことをもとに作詞作曲したオリジナル。ギターなどの楽器を携え、学校を中心に国内各地をめぐる。『自分の役割は日本と世界の子どもをつなぐメッセンジャー』と言葉に力を込める。

【明珍美紀、写真も】

世界各地で見た現状映像と音楽で 学校巡り「地球のステージ」

体育館のスクリーンに、倒壊した家々が映し出される。都立日野高校（東京都日野市）で今月半ば、1年生を対象に行った「地球のステージ」。イラン南部で2003年に発生した大地震で、救援物資を配ったときの経験を語った。「夜、避難民キャンプを巡回して言われた。『なんで物を恵んでもらわねばならんのかなあ……』と。よかれと思って相手が心を傷つけてしまったと落ち込んだ。だが、

物を配るだけが支援ではない。次にサッカー大会を企画した。すると家族や家を失った子どもたちが続々と集まり、その中の少年の一人は「サッカー選手になる」という夢を再び取り戻した。「みんなも一つでいいから自分の好きなことを続けてほしい」。生徒たちと呼びかけた。

山形大医学部の学生だった20歳のとき、インドを旅したのを皮切りに、ケニアや中国、米アラスカ、ペルーなど

国内の学校を中心に「地球のステージ」の公演を続ける心療内科医の桑山紀彦さん



心療内科医 桑山紀彦さん

各国を訪ねた。「フィリピンで出会ったロエナスという名の少女は堤防の穴の中で家族と雨露をしのいでいた」少女のおばあさんの目が赤く腫れていた。持っていた目薬をあげると泣きながら何度も礼を言う。「そのとき僕は医師になって4カ月。誰かに涙をこぼされながら感謝されたことはなかった」。同時に気が付いた。「世の中には

くわやま・のりひこ

1963年、岐阜県高山市生まれ。山形大医学部、同大学院卒。89年からタイとカンボジアの国境地帯の難民キャンプへの支援を皮切りに湾岸戦争後のイラクや内戦下のソマリアなどで活動。2000年に東ティモール、03年にパレスチナ・ガザ地区に事務所を開設して医療支援を実施。「地球のステージ」は山形市で96年に初演され、公演は3500回を超えた。

貧しくて病院に行けない人たちがいるのだ」と。これらの体験が海外での医療支援という行動に結びつき、「地球のステージ」につながった。

もう一つの転機は東日本大震災だ。当時、宮城県名取市で開業しており、発生翌日から2カ月は24時間体制でクリニックを開け、避難所も回った。近くの閑上中学では生徒14人が津波の犠

牲になった。そのうちの一人の母親がクリニックを訪れた。当時13歳の長男を失った丹野祐子さん(48)―閑上中遺族会代表。胸の内をはき出せず、思い詰めていた丹野さんの話を耳を傾け、共に涙した。「どしゃぶりの雨の中で『一緒にぬれてもいいですか』という気持ちだった」という。地球のステージを通じた事業に、震災復興支援が加わり、亡くなった閑上中の生徒の慰霊碑建立や、津波の被害からの復興を祈念する資料館「閑上の記憶」の設置を主導した。昨春、神奈川県海老名市に拠点を移したが、東北の人々と共に歩む気持ちは変わらない。

いまは「日本の子どもたちにもっと元気になってもらいたい」との思いでステージに臨む。「途上国の子どもたちは物質的には豊かでもなくとも目に輝きがある。それはなぜかというところを、考えてもらいたい」。日本でも海外でも、子どもたちの笑顔に接したとき、生きる力がわいてくる。